



Title	国家形成期の武器と武装
Author(s)	禹, 在柄
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41001
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	禹 在 柄
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 3 4 9 7 号
学位授与年月日	平成 9 年 12 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	国家形成期の武器と武装
論文審査委員	(主査) 教授 都出比呂志 (副査) 教授 東野 治之 助教授 福永 伸哉

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、武器と武装にたいする考古学的研究を基礎として、古代国家形成期における軍事編成を解明しようとするものである。とくに、東アジア世界の一地域としての西日本と韓国東南部を中心に、紀元前 2 世紀から紀元後 5 世紀までの武器と武装の変遷を論じ、これを基礎に国家形成過程を解明する手がかりをえようとする。以下、各章別に要旨をまとめる。

序章では本稿の目的と課題そして本論文の研究方法を明らかにする。まず、武器と武具のうち、戦闘における道具としてのみならず権力のシンボルとしての役割をも果たした鉄刀と鉄剣の型式学的分析を基礎とし、さらにこれらの武器と鉄製甲冑との相互関連を検討することによって、軍事編成の変化に伴う政治構造の変革の画期を明らかにし、国家形成過程研究の展望をさぐるようとする意図を述べる。

第 1 章「国家形成と考古学上の 2, 3 の指標」では、まず、国家段階とそれ以前の社会との差異を認識するための考古学上の指標について検討する。とくに、交易システム、軍制と官僚制、集落と墓制について、東アジアの諸地域における考古学的研究の現状と問題点を整理して、次の諸点を明らかにする。

第 1 に、広域の交易システム内において卓越する集団は鉄や塩など限られた資源に優越的に接近しうる条件にあり、さらにそれが集団間の政治関係の成立に重要な役割を演じる。この解明のためには、物資の流通に関する考古学的研究が重要である。

第 2 に、軍事制と官僚制を考古学的に分析するためには、まず秦始皇陵の兵馬俑や高句麗古墳壁画など、軍事編成や文武の官僚編成を明瞭に認識できる考古資料の分析が必要である。前者の分析を基礎に、すでに秦代には職位と兵種による高度に階層化された軍事編成が存在したことがわかる。また徳興里古墳壁画など高句麗古墳壁画は、冠帽類や履の型式差によって職位の高低を区別でき、4～5 世紀の高句麗における官僚編成の位階秩序を解明する手がかりとなる。

第 3 に、集落と墓地の考古学的分析は社会の階層構造を解明する上で重要な作業である。とくに、日本の古墳時代墓制には社会の階層化と政治構造の変化が敏感に反映しており、本研究課題に極めて重要な意味をもつ。

第2章「素環刀の型式学的研究」では、まず、紀元前1～紀元後5世紀の西日本と韓国東南部とにおいて盛行する環状の柄をもつ素環刀を型式学的に分析する。それを基礎に、両地域の素環刀のうち、前1世紀頃に出現する短刀や刀子は、漢代中国の影響による新しい型式の武器と考える。

3世紀頃に出現する大型化した大刀は、後漢の解体と三国の対立という戦乱の時代における実戦用の先進的武器であるとともに、この時期の外交活動の活発化を反映して銅鏡などと同じ性格の政治的威信財の性格をも有したことを明らかにする。

また、5世紀代における素環大刀の型式変化は顕著であるが、これは広開土王碑文が示すような朝鮮半島をめぐる政治的、軍事的緊張に起因する点が大い。すなわち、高句麗で盛行した騎馬戦を導入するなど武装体系の変化に伴って、騎馬戦および鉄製甲冑で武装した兵との戦いにおいて長大な素環大刀はより効果的な武器として盛行したと考えられる。

以上の分析の結果、両地域における素環刀の出現と発達における3つの画期は東アジア世界内の政治的動向と緊密に連動していることが認められる。

第3章「鉄剣の型式学的研究」では、鉄剣の型式学的研究をもとにその変化の画期の意味を考える。まず紀元前後に出現する鉄製短剣は漢代中国の影響によって生まれた新たな武器であるが、韓国東南部と西日本とでは受容のありかたに違いがある。前者ではそれ以前に存在した細形銅剣の特徴を受け継いでいるのにたいし西日本の場合は、朝鮮系の細形銅剣の特徴を受け継いだ鉄製短剣とともに漢系の鉄製短剣がほぼ同時に盛行し始める。これは漢王朝と倭国との直接的な交流ルートの存在を示唆する。

3世紀頃における長剣の出現は、前章でみた素環大刀と同様に、後漢の解体から三国時代にいたる政治変動期と密接な関係をもつ。また5世紀における長剣の型式変化は前章で分析した素環大刀の型式変化と連動するものである。とくに、西日本で長剣の規格化と定型化が顕著となることは、古墳への鉄製武器の多量副葬の現象とともにこの時期に武装集団の編成に大きな変化が起きたことを示唆する。

第4章「武器・武装体系と刀剣」では、紀元前1～紀元後5世紀の武装の体系を概観した上で、武装体系中における刀剣の意味を検討する。

まず、韓国東南部においては、鉄製短剣や素環短刀が盛行する1～2世紀には鉄製の甲冑はなく、同じ条件にありかつ発掘資料の豊富な西日本の例を参考にすると、漆塗りの革製甲や木製甲が盛行したと考えられる。韓国東南部では4世紀になると鉄製甲冑が本格的に出土し始める。しかし4世紀の鉄製甲冑が型式学的に発達を遂げたものであることを重視すれば、今後の発掘調査によって3世紀代の遺跡でも鉄製甲冑が出土する可能性が高い。もしそうなら、3世紀代における鉄刀と鉄剣の長大化は鉄製甲冑の出現と緊密な関係をもつと推測しうるのである。

馬冑・馬甲・桂甲など本格的な騎兵用甲冑が盛行するのは5世紀である。この騎馬用甲冑の盛行とともに素環大刀の型式も変化する。すなわち、明瞭な関をもつ細莖タイプの素環大刀が盛行する。この種の大刀は適度な長さを持ち、莖と柄部の改良により戦闘において斬る際に手に及ぶ衝撃を減少させる工夫が施してある。したがって、騎馬戦および鉄製甲冑で武装した相手との歩兵戦においてはとくに威力を発揮したと考えられる。

西日本では、弥生時代中期後半から後期の鉄製短剣や素環短刀の盛行期には、おもに木製甲が出土する。古墳時代の開始期には素環大刀が本格的に出現するとともに鉄製甲冑が新たに現れる。古墳時代前期の甲冑の出土様相でとくに注目を引く点は、小札革綴冑のように中国大陸に系譜をもつものと、堅矧板短甲や方形板革綴短甲のように朝鮮半島南部に系譜をもつものとの二者が共存することである。

5世紀の古墳時代中期になると、歩兵用の鉄製短甲は、器種の多様化と製作技術の規格化が顕著になる。また、馬冑・馬甲・桂甲など騎兵用の甲冑も新たに出現する。この騎兵用甲冑の導入とともに細莖タイプの小形・中形の素環大刀が盛行する点は韓国東南部と同様である。規格化した鉄製短甲の盛行は、それが古墳に多量に副葬されることをあわせ考えると、この段階に重武装した歩兵集団が存在したことを示唆する。しかしながら、短甲と比べ騎兵用甲冑は量的に少ない点を考慮すると、騎兵用の甲冑は馬に乗る武装した少数の指揮者のためのものとみるべきであり、指揮者に統率された歩兵集団の存在を示すとはいえず、高句麗におけるような騎兵集団の存在を示すとはいえないと考え

る。

第5章「国家形成期の韓国と日本」では、韓国東南部と西日本とにおける国家形成の諸段階を考古学的に時期区分する上で重要となる転換期の諸相について論じ、さらに両地域における国家形成過程は孤立した現象ではなく、両地域間の相互作用を重視すべきことを主張する。

韓国における青銅器時代から初期鉄器時代への転換期において、墳墓における副葬品の変化をみると、多鈕鏡や琵琶形銅剣や小銅鐸など北方系青銅器およびその影響下で韓国で生み出された青銅器が重視される段階から、紀元前1世紀において前漢鏡や鉄製武器など中国系の威信財が重視される段階への大きな転換が認められる。またこの変化は儀器的威信財から権力型威信財への転換でもあった。

日本においては前方後円墳の成立期である3世紀が国家形成において大きな変革期と考えるが、この前後の時期における朝鮮半島の鉄の流通関係の変化は重要である。すなわち、『魏書』「東夷伝」の弁辰鉄の記載にみるように、韓国東南部の鉄は楽浪郡支配が安定しているときは楽浪郡や倭などの広域に供給されていたのに対し、楽浪郡と帯方郡が崩壊した4世紀初頭以降は二郡という大きな消費地を失い、その結果安定した鉄の確保を追求する倭への供給がより重視されるにいたった。韓国東南部勢力と倭とのこの利害の一致が両者の交流を促進し、鉄製甲冑など先進的技術をも倭に提供する契機となったと考えられる。

韓国東南部と倭との密接な関係は5世紀にも認められる。すなわち、前章で明らかにした武器と武具の変化は韓国東南部と西日本との間で緊密に連動して起こっている。この背後に技術や技術者の移動など緊密な接触が存在したもののと思われる。

終章では、以上に述べた各章の論点を改めて要約しまとめている。

論文審査の結果の要旨

本論文の成果は次の3点にまとめられる。

第1に、鉄製の素環刀と剣とを型式学的に分析し、本論文の課題に接近する上に基礎となる考古学的な資料操作を提示したことである。

すなわち、素環刀の個々の出土例のうち、実際に観察できる資料と正確な実測図の公表された資料あわせて89例について、長さ、刃幅、長幅比、刀の関、切っ先の形態、茎と環頭の形態などの要素を統計的に処理して比較し、時代の変遷と編年を明らかにした。さらに、素環刀の長さの度数分布グラフを作成し、その大きさごとの頻度数を明らかにして、25 cm未満を刀子、25～50 cmを短刀、50～70 cmを小刀、70 cm以上を大刀と分類した。既往の研究においては、統計的処理がなされていないために、分類基準があいまいになりがちであったが、本論文の資料操作は説得力に富むものといえる。

鉄剣についても同じ操作を実施し、20～30 cmを小形剣、30～50 cmを短剣、50～70 cmを小剣、70 cm以上を長剣と分類する。

また、素環刀と剣の系譜と編年を考察するために、朝鮮や日本に近い中国東北地方のみならず中原や中国西南地方の資料とも比較研究を実施した。さらに刀剣の使用法を解明するために中国の漢代の画像石や中国西南地方の岩壁面の絵画表現などをも参照した努力は評価できる。

刀剣に関する以上の研究は、すでに個別論文として発表されたものであるが、中国、朝鮮半島、日本の三地域にまたがる刀剣の研究として諸論文に引用され、学界でも評価が定着している。

第2に、武器と武具の変化を中国、韓国東南部、西日本の3地域の相互関係として把握したことは、本論文の大きな特色である。まず、たえず先進的な技術を開拓した中国の動向は無視できず、武器の輸出禁止策が強く守られた時期と規制が緩和された時期とでは、周辺地域における武器の発達に差が認められる。

また、論者が指摘した、紀元前1世紀における鉄短剣の開始期における韓国東南部と西日本の差についての指摘も

重要である。在来の青銅短剣の伝統を残す前者と漢系の鉄製短剣を直接輸入しかつ模倣する後者。これはまた、この時期における漢王朝と韓国東南部と倭の政治関係の密接度の違いを意味する点で重要な指摘である。

第3に、3世紀から5世紀の韓国東南部の鉄生産を広い範囲の物資流通関係の変動のなかで再評価したことである。この時期の倭が鉄の原料を朝鮮半島東南部に求め、その供給を安全に確保するために朝鮮半島における政治的覇権を追求したこと、またそれが倭の五王の遣使と將軍号要求の経済的理由であるとの解釈はすでに提出されているが、楽浪、帯方の2郡の崩壊によって鉄の消費地が減少したことの解決策として東南部勢力が鉄の新たな販路として倭を重視したという解釈は新しい試論である。朝鮮半島諸勢力と倭との相互関係を研究するという近年の新しい動向の一つとして評価できる視点である。

本論文は以上の通り積極的に評価できる成果とともに、改善が必要と思われる論点もいくつかある。

その1は、武器や武具の研究を基礎として武装体系を解明しようとする限り、武器としては刀剣以外に槍、矛、戈、そして弓矢などについての考察が必要なことである。研究に要する時間とエネルギーを考慮すれば、刀剣と同じ程度の詳細さを要求するわけではないが、刀剣以外の武器について概観する程度の言及が欲しいところである。

その2は、個別の武器や武具の研究とともに重要な、それが使用される場の考察がやや不十分な点である。戦闘の具体的場面を示す文献史料は断片的ながら存在する。それによれば、武器や武具の確保以外に兵隊の動員、船団の組織、馬の調達、城郭の建設など、戦闘の結果を左右するもっと重要な要素の考察が必要であることが分かる。また、これらを究明するのに有効な考古資料も存在する。それらとの有機的関連が明らかにされれば、武器や武具の意義は、より明瞭となったに違いない。

その3は、刀や剣の戦闘における機能について、さらに具体的な考察が望まれる点である。とくに刀剣の外装との関連にあまり考察がないのは惜まれる。素環刀の柄巻の状態、刀剣の柄の形状、材質、大きさ等と戦闘での機能の関係などについてより突っ込んだ検討があってよい。資料の残りは万全でないが、外装についてもかなりの程度考古学的考察は可能のはずであり、この考察によって本論文ではややあいまいな実用刀剣と儀器としての刀剣とを分離して検討することも可能になると考えられる。

その4としては、楽浪郡崩壊に伴う鉄素材流通システムの変化という指摘は興味深いだが、それは楽浪郡崩壊による中国の規制がなくなったことに起因する変化とも解釈できる。また、4世紀の朝鮮半島の政治情勢における伽耶と倭との友好関係の形成との関連も考慮する必要がある。論者の主張を説得力のあるものにするにはさらに実証的検討が必要であろう。

その他、本論文での用語の使用法についていえば、「威信財」(prestige goods)の意味をもう少し慎重に考えてこの語を使用することが望まれる。たとえば、第5章において儀器的威信財から権力的威信財への転換を説くが、儀器的威信財の概念は理解しにくい。

以上に述べたように改善の必要な箇所があるとはいえ、本論文は武器と武装の変遷を東アジア的視点から有機的に解明したものとして積極的に評価すべきであり、博士(文学)の学位を与える条件を備えたものと判定する。